



第3部 京都医療科学大

④ 放射線の安全利用 健康影響にも配慮

エックス線という、人の目にみえない「光」の存在を、レントゲン博士(ドイツ)が発見しました。120年以上も前のことです。その後、エックス線に類似する光の存在が相次いで確認され、これらをまとめて放射線と呼ぶようになりました。

放射線を利用すれば身体の中をのぞく(透視する)ことができます。エックス線が発見されると、骨折や戦争で受けた銃弾の診断に使われるようになりま



おおの・かずこ 愛知医科大学医学部博士課程修了。医学博士。愛知医科大学付属病院で勤務。2007年から京都医療科学大学教授。専門領域は放射線診断・医療放射線防護。

大野 和子 教授

した。しかし、当時は放射線が身体に影響を及ぼすことは誰も知りませんでしたし、思ってもいませんでした。このため放射線の医学利用が始まると、間もなく医療関係者の健康障害が報告されるようになりました。

患者を救うためには無くてはならない放射線です。継続して安全に使うため、健康への影響に関する研究が始まりました。エックス線の発見から約

40年たつと、どのくらいの放射線量が血液中の白血球が減少するか、皮膚に障害が発生するか、発がんが増加するか―が明らかになりました。放射線利用の歴史は、放射線の健康影響を知った歴史でもありません。

現在は放射線を安全に用いるよう法律も整備され、患者も医療関係者も安心して安全に放射線を利用して検査します。放射線を使う検査では、エックス線コンピュ

安心して検査を受けてください。医療関係者には1年間に浴びる放射線量の上限を決めた法律が適用されていますが、ほとんどの人が自然界から浴びる放射線量と同じくらいの放射線量しか受けていません。診療放射線技師を養成する本学の学生も、昔は圧倒的に男子学生が多かったのですが、年々女性の割合が増え、最近では40%が女子学生となっています。放射線医療分野でも女性の活躍が目立っています。

次回、最近注目されている人工知能(AI)の医学利用について紹介いたします。